令和 5 年 8 月 31 日

2022 年度「市民防災・減災活動公募助成」事業実施報告書

団体名 NPO 法人ななうらステーション
代表者・役職名 氏名 理事長 藤井ゆみ

▼報告書の扱い、および記入にあたっての注意点

この報告書（精算報告書以外）は、ホームページなどで公開する予定ですので、広く読まれることを想定してご記入ください。また、編集段階で、表記・表現等を事務局で編集する場合がありますので、あらかじめご了承ください。語尾の表現は「です・ます」調でお願いします。報告書に掲載するため活動の内容がよくわかる写真（2枚程度。写真の肖像権問題がないものの提出をお願い致します）を添付して下さい。

1. 助成プロジェクト名

災害時の一時避難が野外、さて どうする？

2. 団体の概要（創設の経緯、創設時期＝法人で、法人化前に任意団体での活動がある場合、その段階からご記入ください。会員数など。180文字程度まで）

2007 年5月、第三セクター肥薩おれんじ鉄道有人駅の業務委託を請け負うため、任意団体ななうらステーションを立ち上げ、同年10月から、佐敷駅・肥後田浦駅・水俣駅の業務を受託し、現在に至っています。2008 年1月に、熊本県から NPO 認定をうけ、NPO 法人ななうらステーションとなりました。役員10名、スタッフ4名で、沿線住民が安心して暮らせる地域を目指して様々な活動を行っています。

3. プロジェクトの目的とその背景（※応募申請書に記載のものでも可） 250文字程度まで

芦北町は、令和2年7月豪雨災害の被災地です。それまで、支援する側であったのが、自分たちが支援される側になりました。この災害で、私たち団体は、その両方を体験しましたが、その場その場で臨機応変に対応するしかありませんでした。子供は守られるべき存在でありますが、子供でもできることを探すといろいろあります。そして、悲惨な状況の中で子供たちの姿や声は、とても力強い存在になりました。そんな子供たちには、これから先に起こる災害に遭遇した際、自分の考えを言葉にして、行動できる人として育っていってほしいと思います。

4. プロジェクトの内容（※当初予定と変更がない場合は、応募申請書に記載のものでも可） 300文字程度まで

① 炊き出し体験
・大きな鍋に野菜を入れる。電気で沸いたお湯を使う。ガスの火を調節してみる。
・非常食アルファ米を作って食べてみる。水とお湯を使ってみる。
・草の上で快適に過ごすため段ボール箱でいろいろ作ってみよう。
・懐中電灯でテントの中を明るくしてみよう。

② 野外で安心して過ごすために大切なことを考えるワークショップ
・段ボール箱でいろいろ作ってみよう。
・残りを使って、おもちゃを作ってみよう。

5. プロジェクトの実施で得られた「結果」(OUTPUT。実施回数や参加者数など)、「成果」(OUTCOME。事業によって生まれた直接的な変化)、「社会的な変化」(IMPACT。事業が社会に与えた影響)などの『効果』 300文字程度まで

①炊き出し体験
・参加家族・個人　10 組 子ども 15 名(幼児、保育園児、小学生低学年)
・婦人会 10 名 、一般社団法人みなすまいる 2名、スタッフ 4 名、ななうら 1 名
・カレー炊き出し 400 食、非常食アルファ米 200 食 防災フェスタの来場者にふるまった。
②ワークショップ
・参加家族・個人　15 組 子ども 20 名 (幼児、保育園児、小学生低学年)
・一般社団法人みなすまいる 2名、スタッフ 4 名、ななうら 1 名
・段ボールイス 30 個製作、イベント観覧者にも使ってもらった。
「結果」「成果」「変化」「効果」
・災害、有事の際、子どもが炊き出しなどの手伝いすることについて、考えてない意識していない大人は多い。
・非常食アルファ米を初めて食する人が多く、美味しくないというイメージの払拭ができた。
・カレーは作れると、家での手伝いに意欲的になった
・段ボールは捨てるものでなく、生かすことができるものですね、と大人も意識が変わった。
・切りくずをあつめ、新しいおもちゃを作る子どもがいた。
・お父さんが座ってもつぶれないように、どうしたらよいか考えて工夫する子どもがいた。
・各会場の周辺にある植物について、名前があること、生活に使えるものがあるという話を興味深く聞いてくれた。
・水俣では災害による被災体験がほとんどないため、防災に関して意識が薄いかもしれないという話を聞いた。
・日常生活の中で、意識を変えるだけで防災に繋がることがあるのだと、多くの親御さんが興味関心を持っていただけた。

6. プロジェクト実施にあたっての課題、今後の展望など 300文字まで

・この事業に協力してくださる方々と企画を考えている際、水俣市主催の防災フェスタが行われることになり、婦人会の炊き出し、一般社団法人みなすまいるの非常食体験が実施されることになったため、防災フェスタと同時開催することになりました。100 食でも、食材の準備などかんがえると、何度も同じことをするのはキツイ、というのが協力者の本音で、他のイベントに参加する形での事業実施となりました。
・日頃、一般社団法人みなすまいるが運営する「ふれあいセンター」に集っているご家族が各会場参加してくださいました。
・事前の食材切りなど、大人たちで行ったことも多々ありますが、当日、子どもたちは、婦人会の方々の声掛けに合わせて手伝いをし、大きな鍋にたくさんのカレーが出来上がっていく過程を楽しんでいました。
・非常食アルファ米の準備で、お湯や水をいれたり、パックにつめたり、子どもたちでもできることを体験してもらいました。
・保育園児や小学生低学年の子どもは、興味関心の気持ちが強いのか、大人の中でも気後れせず、いろんなものが出来上がっていく過程を面白いと楽しんでいることに感心しました。
・災害の際、炊き出し、ごはんづくり、というのは大人の女性が担当するような意識がありますが、母親や家族、また見知らぬ大人に混じって子どもがいる場面は、まだ大きな災害を体験していない方々にとってどのように見えたのか声を聞けばよかったです。
・一般社団法人みなすまいる、婦人会や各イベントの主催者、スタッフさんからは、このような体験もいいね、もっと面白くできそうな気がする、というご意見をいただき、これからも多くの人と一緒に、防災についてちょっと考えてみる機会が作れそうな気がしています。

7. 参考資料：プロジェクトで作成したチラシ、パンフレットやマスコミで紹介された記事等の現物またはコピー、活動状況の写真などを、“必ず”、別途、ご提供ください。

炊き出し
防災訓練実施中